文福ふれあい新春寄席

㈲ 文福らくごプロモーション
桂 文福氏・桂 まめだ氏

火曜午餐会・１月初例会を、19日、当部５階大会議室で開催した。

今回のゲストは、テレビやラジオでおなじみの桂文福師匠と、弟子の桂まめだ氏。新春初例会にふさわしく、落語、相撲甚句、昭和歌謡、河内音頭、大道芸と、盛りだくさんの内容に、会場は笑いの渦に包まれた。

菊池会長挨拶

新年あけましておめでとうございます。今年は５団体合同の新年名刺交換会もございませんでしたが、皆様には本日お元気にお集まり頂き、誠にありがとうございます。100年に一度のコロナショックで大変な事態になっておりますが、これまでも、日本人はバブル崩壊や東日本大震災等、100年に一度の災難を乗り越えて来ました。大変な状況ではありますが、皆様も元気を出して乗り越えて行って頂きたいと思います。本日は、文福一門をお招きしておりますので、ひとときではございますが楽しんで頂ければ幸いです。改めまして、本年もどうぞよろしくお願い致します。

桂文福一門

満面の笑顔で登場した文福師匠。ご縁を頂けたと感謝の言葉を述べた後、「奈良県経済倶楽部新春初例会とかけて、金のシャチホコと解く、その心は、なごやか」と早速、謎かけや小噺で場を和ませた。その後、弟子７人、孫弟子２人、文福一座20名以上の中から選ばれた大和郡山市在住の弟子、桂まめだ氏が登場。

桂 文福氏

－桂まめだ－　「平林」

出囃子と共に登場した桂まめだ氏。「まずは皆様の健康と長寿を祈念して寿限無の名前を」と長い名前を滑らかに読み上げ、小噺をはさんで、落語「平林（たいらばやし）」に入った。

（あらすじ）

丁稚の定吉に、本町の平林（ひらばやし）さんに手紙を届ける用事を言いつけた旦那さんは、忘れっぽく、字の読めない定吉に、「ひらばやしさん、ひらばやしさん」と言いながら行くようにと知恵を授ける。はじめは言いつけを守っていた定吉も、道中、美味しそうなりんご飴に気を取られ、「りんごあめ、りんごあめ」と言っている内に、どこへ届けるのかわからなくなってしまう。困った定吉は道行く人に宛名を読んでもらうことにする。

初めの人は『たいらばやし』と教え、２番目の人は『ひらりん』と教え、３番目の人は字を分解して『一・八・十のもくもく』、４番目の人は『ひとつとやっつでとっきっき』と教える。困った定吉が、全部続けて「たーいらばやしか、ひらりんか、いちはちじゅうのもーくもく、ひとつとやっつでとっきっきー」と言いながら歩いていると、定吉を知る人が通りかかる。

「おぉ！定吉、どこへ行くんや？」

「あ！本町のひらばやしさん。……お宅に用はおまへんわ」

※「平林」：古典落語の演目。歴史の古い噺で、江戸初期の歴史書「醒睡笑」の一編。

－桂文福－
新作、文福作「演芸道場」

芸達者な文福師匠。再登場と共に、なぞかけ、小噺や相撲甚句、昭和歌謡メドレーと、次から次へと美声を披露した後、「演芸道場」に入った。

（あらすじ）

町内対抗演芸大会の代表に出なければならなくなった男が、新聞広告で見た演芸道場へやって来て、歌やものまね、民謡などを習う。

その歌も、演芸道場の先生いわく「短くて情のある唄、まずは１曲目、かわいい赤ちゃんの唄。パチパチ（手拍子）して、ハイハイ!!」（赤ん坊のハイハイ）。「２曲目、健康は口元から、歯医者さんの唄。パチパチ、ハ～どうした!!」「3曲目、ゴルフのうまい方の唄。パチパチ、ヨイショット!!」。

民謡では、新、佐渡おけさ「ハァ～佐渡へ～行ってお風呂に入る～その時使うのはタオルと石けんと、おけさ！！」などトンチンカンな民謡を唄い、「やはり民謡の本場は東北地方、本場のドンパン節を」と、「ドンドンパンパンドンパンパン！」と何曲も歌う先生に、習いに来た男、先生に「すんません、もう１軒となり町にある演芸の教室にかわりますわ。さいなら～」

「ちょっと、あなた、なんでですか?」

「それはドンパン節でしょう。それ以上きいたら、もう、アキタ（秋田）」

桂 まめだ氏

大道芸と河内音頭

再び、まめだ氏が登場。文福師匠と言葉を掛け合いながら、懐かしいかくし芸を披露した。

まずは「皿回し」。「皆様方の運勢が、さらにまわりますように」と小さい皿や大きい皿を細い棒に乗せて回す姿に会場内は拍手喝采。

次は「南京玉すだれ」。「あー、さて！さて！さては南京玉すだれ！」と歌いながら、珍しい「ヒラメの舞い踊り」や「スカイツリー」などを作って見せる姿に、会場内は再び拍手喝采だった。

最後は「河内音頭」。東西落語界唯一の河内音頭取りでもある文福師匠。世相を歌詞に入れた河内音頭の景気の良い歌声に、会場内も大きな手拍子で答えた。

和歌山出身で、現在奈良県生駒市在住の文福師匠、最後は謎かけで締めた。

「皆さんのふるさと奈良県とかけまして、紀州和歌山の備長炭と解く。その心は、どちらも、すみよいなぁ」

南京玉すだれ

皿回し

現在、「落語で村おこし」を合言葉に全国市町村での「ふるさと寄席」の座長として若手をひっぱり、また「真の笑いは平等な心から」のテーマで、人権講演も好評。

角界との交流も深く、大相撲評論家として、ラジオ、相撲誌等でも活躍中。

演歌歌手「市川由紀乃」ファンクラブ会員。

毎週火曜日、ユーチューブ「たぬき小屋から福もろ亭」配信中。生駒市在住。

【受賞】

ABC 落語漫才新人コンクール審査員奨励賞（文福青春日記）（昭和56年）

日本「放送演芸大賞」ホープ賞（昭和58・59年）

朝日放送バイプレーヤー賞（昭和60年）

和歌山県文化奨励賞（平成５年）

和歌山県桃山町民特別功労賞（平成８年）

和歌山県桃山町第１回ふるさと文化賞（平成13年）

【役職】

公益社団法人 上方落語協会理事

関西演芸協会理事

和歌山芸能県人会（紀州つれもて会）会長

わかやま応援団（観光大使）

兵庫県赤穂市観光大使（夫人の出身地）

「ふるさと寄席文福一座」座長

新撰落語もぎた亭（新作落語グループ）メンバー

【趣味・特技】

大相撲見物・漫画をかく・落語をきく・旅（主に鉄道）

東西落語家約1,000人の中で唯一の河内音頭とりで、相撲甚句の芸と合わせて「エンカイティナー」の異名あり。

《桂まめだ氏》

本名：今泉　和（かなう）

文福門下三番弟子

実家は田原本。現在は大和郡山市在住。

天理シャープ勤務を経て、落語界に転じ20年

天然のとぼけた味の落語に加えて大道芸もおもしろい。

まめだは豆狸の意味。

プロフィール

《桂文福氏》

昭和28年 和歌山県那賀郡桃山町（現、紀ノ川市）で出生。

本名：田中　登

昭和46年　県立粉河高校卒業後上阪、大日本印刷大阪工場に就職。

昭和47年　三代目桂小文枝（後の五代桂文枝）に入門。

平成元年　吉本興業から独立し、（有）文福らくごプロモーションを設立、代表となる。